

2021年3月21日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 16 章 25～33 節

説教題：勇気をだしなさい

今日の聖書箇所の「わたしはすでに世に勝ったのです」(33)を読んで「讚美歌第二編 164 番『勝利をのぞみ』」という讚美歌が強く思われました。アメリカでキング牧師が導いた公民権運動の象徴の歌として歌われたと聞きました。インターネットで、ジョーン・バエズという白人の女性シンガーが、当時のオバマ大統領列席の集会でこの讚美歌を歌っているのを見ました。会場にいる黒人の人も、白人の人も、アメリカの歴史を思っていたのでしょ、歌詞を噛みしめるようにして声を合わせていました。この讚美歌は「讚美歌 21」という讚美歌集では 471 番にあるのですが、4 節の歌詞はこうです。「平和と自由、主はいつの日か、与えてくださる。ああ、その日を、信じて、我らは進もう」。苦難はあるのです。私達にも多くの苦難があります。しかし、主が祝福を与えて下さる、そこに希望があるのです。そしてイエス様は、今日の箇所で「あなた方にも私の勝利がある。勇気を出しなさい」と言って下さっているのです。

イエス様の告別説教を学んで来ましたが、今日の箇所は最後の部分です。最後の説教とも言える箇所です。イエス様は 33 節で「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです」(33)と言っておられます。つまり励ましのメッセージを語って下さったのです。この箇所から 2 つの励ましを受け取りたいと思います。

1：神は私達を愛しておられる

イエス様は 25 節で「これらのことを、わたしはあなたがたにたとえて話しました。もはやたとえでは話さないで、父についてははっきりと告げる時が来ます」(25)と言われました。イエス様は、この告別の説教で、大切なことを譬えを用いて語って来られました。「これらのこと」というのは、特に 20 節の「あなたがたの悲しみは喜びに変わります」(20)という箇所だと思えます。つまり「十字架の悲しみが復活の喜びに変わる」という「十字架と復活」のことです。それを「出産の譬え」を用いて語られました。しかしここで(25 節)「もはやたとえでは話さないで、父についてははっきりと告げる時が来ます」(25)と言われます。これは不思議な言葉です。「これらのこと—(十字架と復活のこと)—をもはやたとえでは話さないで、十字架と復活についてははっきり告げる時が来ます」というのが、普通の言い方ではないでしょうか。なぜ「十字架と復活について」ではなく「父について」なのでしょう。実はこの言葉に、大切な励みポイントがあるのです。

宗教改革者ルターは「自分の罪について思えば思うほど、『正しい神、義なる神』が恐ろしかった」と言っています。彼には「父なる神」に対し

て「裁きの神」のイメージがあったのです。ある人が「聖書の神にはついて行けない、厳しすぎる」と言いました。私達は「神は愛なり」と聞いています。「神は愛なり」。しかし私達も「旧約聖書」等を読むと、神を「厳しいお方である」というイメージで捉えてしまうことがあるのではないのでしょうか。しかしイエス様は「十字架と復活についてはっきり教えよう」と言わないで「父についてはっきり教えよう」と言われました。それはつまり、十字架も復活も全て父なる神様から出ているということです。「十字架について学ぶことは、父なる神について学ぶことだ」ということです。

数年前の宮崎市民クリスマスにも来られた岩渕まことさんの歌に「父の涙」という歌があります。6歳でいらしたのでしょうか、ご自分のお嬢さんが脳腫瘍と診断されて、ほとんど助かる見込みがないと分かった時に作られた歌のようです。彼は「愛する我が子が死んでしまうかも知れない」という、父親として胸の張り裂けるような痛み、悲しみの中で、独り子イエス様の十字架の苦しみを見守る父なる神様の痛みを思いを馳せるのです。そしてこんな歌詞が生まれました。「心に迫る父の悲しみ、愛するひとり子を十字架につけた、人の罪は燃える火のよう、愛を知らずに今日も過ぎて行く、十字架からあふれ流れる泉、それは父の涙…」。この歌は、ここでイエス様が言おうとしておられることを良く教えてくれるように思います。つまり、全ては父なる神様の愛より始まっているということです。だからイエス様は「わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです」(26~27)と言われます。私達と神との間を隔てていたのは、私達の罪です。自己中心です。御心を無視して生きる思いです。イエス様を信じたからといって、私達がすぐにその罪から解放されるわけではありません。相変わらず神の合格点には遥かに及びません。しかし私達が、イエス様の十字架の贖い、私の罪は主の十字架で全て赦されたと信じて、感謝した、それはつまり、十字架に込められた私達を愛する神の愛を信じた、という一点で、神様はあらゆる障害を越えて、私達に手を伸ばして下さるのです。そして私達の神様に感謝する思いと、神様の私達を愛する思いが会うのです。そしてその出会いによって、私達は神に結ばれ、神の愛を受けながら歩いて行けるようになるのです。神様に直接祈ることが出来るようになるのです。私達は今、26節の「その日」(26)に生かされているのです。

私達への励まし、それは「神様は独り子を犠牲にしたほど私達を愛しておられる方である」ということです。私達の信仰生活には色々なことがあります。時には「神は本当に私を愛しておられるのか」と思う時があります。「私にだけは不当に厳しい、私には恵みがない」と思う時もあります。

しかしこの個所は、そこで私達が神の愛を信じるように、そこも御手の中だと認めるように、神は私に最善を為して下さると信じるように、私達を励ますのです。なぜなら神は、私達を愛するが故にご自身の独り子まで犠牲にして下さった方だからです。その方が良くして下さらないはずがない。その信仰に立つ時、私達はきっと神の愛、摂理的な御業を経験するのです。

2：主イエスはご自身の勝利に私達を与らせて下さる

イエス様は 33 節で「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです」(33)とされました。彼らは 29～30 節で素晴らしい信仰告白をします。しかしイエスは言われます。「あなたがたは今、信じているのですか。見なさい。あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています」(32)。実際、イエス様が十字架に架かれると、弟子達はイエス様を捨てて逃げてしまいます。私達の信仰も、いつもそのような不確かな危うさ、弱さがあるのではないのでしょうか。弟子達は、本気で告白したのだと思います。それでも彼らは、十字架の死という現実を見せられて、その告白が飛んで行くのです。それは、私達の現実でもあるのではないのでしょうか。イエス様は、彼らの失敗の予告を為さいました。では、その失敗の予告が、どうやって彼らに平安を持たせるのでしょうか。

弟子達はその後、イエス様の予告通り、ゲッセマセでイエス様を残して散って行きます。見事に失敗します。でも、復活のイエス様は、その彼らのところに現れて「平安あれ」と言われたのです。彼らは、失敗を通して「イエス様は、自分達の弱さや失敗を全部分かった上で、なお愛し、あるがままを受け入れておられた」ということを理解して行くのです。

私はザアカイの話が大好きです。イエス様がエリコの町を通られる時、ザアカイもイエス様を見たいと思いましたが、彼は、背が低かったので群衆に遮られないように、木に登ってイエス様を見ていました。イエス様は、そのザアカイの下に立って「急いで降りて来なさい」と言われたのです。いわば、「背伸びしなくて良いのだよ」と言われたのではないのでしょうか。

弟子達も、私達も、どう背伸びしても、自分以外では在り得ません。しかし神は、私達に良いところがあるから愛して下さるではありません。ありのままの私達に向かって「わたしの目にはあなたは高価で尊い」(イザヤ 43:4)と言って下さるのです。彼らは、その後も失敗したでしょう。つまりいたでしょう。でも彼らは「こんな私を、イエス様は赦し、愛し、召して下さったのだ、私は赦されて在るのだ」と、主の赦しに自分が今ある根拠を置くのです。そして、こんな自分を引き上げ、支え、前に歩かせて下さる、神の中に希望を置くのです。神に希望を置くようになった時から、彼らには神の許から来る不思議な平安があったのです。

ただ、イエス様は「私を信じたら問題はない」とは言われませんでした。「患難はある、しかし、その中にあっても、平安は尽きない」と言われるのです。パウロは、それを「患難さえも喜んでいきます」(ローマ 5:3)と言いました。なぜ、患難の中でも喜んでいただけるのか。それは、神に希望を置く者は、患難はただの患難ではない、患難には必ず神の意味と目的がある、とすることが出来るからです。また、患難の中でこそ、神の御業を経験出来る、と信じる事が出来るからです。そして、ここでイエス様は「わたしはすでに世に勝ったのです」(33)と言われました。

1人の姉妹がおられます。大変な境遇で生まれ育ち、お母さんは、余りに辛いので何度も一緒に死のうとしたほどでした。しかしその度に命を守られ、やがて成長し、結婚をします。しばらくして病気を通して信仰に導かれるのです。それからも試練はありました。しかし、その度に神様が助けて下さいました。彼女は色々な場所でその証をしました。そんな彼女にとって、一番の祈りの課題はご主人との関係でした。ご主人も一度は信仰を持ったのです。しかし信仰から離れ、日曜日の朝からお酒を飲むようになり、やがて彼女の信仰生活を激しく迫害するようになるのです。そんな夫を愛せない、裁きばかりが出て来る、それが苦しみでした。長い間、苦しみました。やがてご長男夫婦にお孫さんが生まれるのですが、7ヶ月後、天に凱旋して行きました。家族にとって大きな悲しみでした。ところが、そのことを通して、お孫さんの母親(お嫁さん)が神を信じ、洗礼を受け、そして何とご主人が洗礼を受けたのです。不思議なことでした。彼女は言っています。「孫は、我が家のために一粒の麦となったのでした。神様は積まれた祈りを決してむだになさることはないことを知り、良いことも悪く見えることも、万事を主に感謝する信仰が強められたのです」。やがてご主人が病気で倒れるのですが、病床で「イエス様が一緒にいて下さると思うと嬉しかったよ」とポロポロ涙を流したのです。そんな時、フト開いたノートに以前書きつけておいた「ヨハネ 11:3,4」の文字を見つけて、聖書を開いてみました。「この病気は…神の子がそれによって栄光を受けるためです」。この言葉に触れた瞬間、長い苦しみに勝利させて下さったことを感じるのです。初めて夫への思いやりが芽生えて来たのです。大きな解放でした。そして、これまでの人生を振り返って、病も、多くの試練も、何もかも、人生の問題1つ1つに、御手の中に守り、乗り越えさせて下さった神様を思っ感謝するのです。

「わたしはすでに世に勝ったのです」(33)、それは「わたしは、世のあらゆる妨害にも拘わらず、神の御心の道を歩み切った」ということです。それは同時に「私が、御心の道を歩み切ったから、あなたは神の子となれる。あなたを神の平安から引き離すものは何もない」という宣言だと思

ます。それは「私達は天の御国に行く者にされている、その特権は、世の何者も奪うことが出来ない」ということでもあるでしょう。しかしそれだけではなく、イエス様の世に対する勝利は、私達の思いを超えているのです。十字架の後に復活があることを、予想することが出来た者がいたでしょうか。誰もいません。しかし、イエス様の復活の勝利は、弟子達にとっても、十字架を前に絶望していた彼らの人生に対する勝利だったのです。彼らは主の勝利に与って行くのです。神の勝利は、いつも私達の思いを超えているのです。その神の不思議が、様々な困難の中で悩む私達にも、きっとやって来るのです。困難に悩む私達をも、主が勝利に与らせて下さるのです。「勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです」(33)とは、そういうことだと思います。

その励ましを頂いた私達も、イエス様が神の御心を歩み切って勝利の宣言をなさったように、神を信じる信仰を一途に歩んで行きたいと思います。ある本に「我々は神の子であり、イエスに従って行く者である」とありました。「神の子」とは「イエスに従って行く者」なのです。それが神から来る平安、勝利を、待望する方法なのです。様々な戦いがあります。でも、イエス様にしがみついて行けば、私達も、やがて主の勝利に与るのです。